John N. Edwards and David H. Demo (eds.), *Marriage and Family in Transition*

Boston, Allyn and Bacon, 1991, 519pp.

家族と結婚は，常に互いに影響を与えながら変動している．しかし，時にその変化が大きく目につくことがある．今のアメリカは，まさにその時である．アメリカにおいて結婚と家族をめぐる状況は非常に大きく動いている．

そのようなアメリカの状況をとらえる論文集が本著である．それは，「デートと配偶者選択」，「結婚と家族内の関係」，「家族と結婚制度の分解とその影響」，「新たな親密なる関係と未来への課題」の4部からなり，それらの問題を適切にとらえる代表的な論文38編からなる．

第1部においては，婚前交渉が「結婚」に与える影響を扱う J. D' Emilio and E. B, Freedman の論文と，「共生」(cohabitation) が「結婚」全体，また，配偶者選択過程に大きな影響を与えているという G. B. Spanier の論文が興味深い．

第2部では，共働きが夫婦の役割を変化させ，互いのライフコースを変化させている実状や片親家族における親子関係，親子役割の問題点を描いている．

日本では容易に理解しがたい現代アメリカの「子育て観」を論じる E. E. LeMasters and J. DeFrain の論文は，アメリカにおける結婚や出生動向のデータ解釈に有用であろう．

また，平均寿命の伸びが家族の構造や個人のライフコースに与える影響を扱ういくつかの論文は，そのまま日本においても現状分析や研究に役立つであろう．たとえば，祖父母の役割が個人的にもライフコース研究にも大切となること，また，死別者に対する情緒的・経済的援助に関する大いなる必要性の指摘などである．さらに，寿命の伸びは，親の介護時間の増加を生んでいることが指摘され，いわゆる中年期が子どもと親にはさまれる問題点の多い「サンドウィッチジェネレーション」となることを論じる．

日本における父子世帯や母子世帯の増加と人口高齢化の問題を探求する際の参考となるであろう．

第3部では，離婚にいたる過程，離婚の子どもへの影響，さらに，再婚後の家族における問題をも扱い，家族の成員間で共通の認識がないため成員全員が苦しんでいる事情を描く．アメリカにおいては，離婚後に子どもの90%は母親と住み，母親が情緒的な支えを子どもに求めたり，家庭内での父的な役割を求められることが多く，そのため親と子の通常見られる壁があいまいになり，母親が母としてというよりも友だちとして機能するようになる，という家族の変容と問題点を描く．

また，夫婦の共有する資産の蓄積が，夫婦を分かれにくくさせている，と主張し，「子ども」の共有以上に「モノ」の共有が夫婦のかすがいとなっているとする，A. Booth 等の論考も興味深い．

さらに，再婚後の義理家族（step-families）の行動規範が明白でないために生じる問題を扱う論文も興味深い．日本においては，まだ，対象が少なく研究するのが困難な再婚家族であるが，よい先行研究例となろう．

第4部では，複数婚や同性間の「結婚」や性交渉を伴わない人口再生産，高齢化社会における「老いと若きの戦争」を描く．そして，最後に，家族志向の強まり（pro-family）がアメリカの全体的な動向であるにしても，支配的な家族像がないために，永遠に審議未了の状態になりかねないことが議論される．

さて，本著においては，出産や子育てという生物学的ノルムから離れて遠く，自分の生活の快適と自己実現を生活の目的とする「meism」の普及が及ぼした人口学的結果が論じられている．とまとめることができよう．その「meism」の結果は，近い将来，日本にもきたると考えられる．したがって，結婚や出産が，人生の目的や必然の通過点ではなくなりつつある現在の日本にとってよき導きの書となるであろう．

そして，われわれは，とかく結婚や家族に対しては固定的なイメージを描きがちであるが，それが大きな誤謬であることを本書は教えてくれる．同時にその教えの認識は，人口学的分析の視座の拡大につながるであろう．

（坂井博通）